



第3回 木育・森育楽会

主催：木育・森育楽会実行委員会 共催：宮城県

みやぎアートセンター



平成29年度 木育・森育 楽会誌



平成29年度 木育・森育楽会誌

発行：平成30年3月

木育・森育楽会誌実行委員会 編

発行者 NPO法人木づかい子育てネットワーク

ホームページ <https://www.mokumori-gakkai.org/>

フェイスブック <https://www.facebook.com/mokumorigakkai/>

平成29年度 林野庁 新たな木材需要創出総合プロジェクト事業

この冊子の用紙は、間伐材を活用しています。



木づかい子育て
ネットワーク



www.mokumori-gakkai.org/



ご挨拶

木育・森育楽会も第3回を迎え、多くの皆様に関心をもっていただけるようになってきました。全国各地で木育を実践するプレイヤーの皆様が、それぞれの経験や知識を持ちより、それを共有、拡散することを目指してきたこの取り組みは、学校教育における木育・森育の普及、そして地域の木育・森育ネットワーク形成、強化への貢献を目指し開催された宮崎大会において、新たな段階に突入したことを感じさせました。また、こうした取り組みが評価され、ウッドデザイン賞2017においてコミュニケーション分野で入賞することができました。これまで協力して頂いた皆様に深く感謝の意を表します。

木育・森育は子どもに向けた木づくり運動、森づくり運動ではありません。幼児期、少年期、青年期、そして青年、高齢期までのあらゆる段階における、人間あるいは社会と木、森の関わり方を考える活動です。この活動に、林業、木材産業関係者はもちろん、行政、教育、福祉、医療、建築、デザインなど、それぞれの立場がどのように実践し、貢献していくか、今後も考えていく必要があります。その検討の場として、これからも木育・森育楽会を実践し、この取り組みをひろげていきたいと考えております。

本誌においては、今年度の木育・森育楽会、そして関連する取り組みの一端を紹介しております。皆様の活動の参考にして頂ければ幸いです。

NPO法人木づくり子育てネットワーク

浅田 茂裕



目次

ご挨拶	1
学校木育の推進と課題	2
実践者の声	2
第3回木育・森育楽会in宮崎	
プログラム	3
問題別討論	4
基調講演	5
分科会	7
全体討論	8
表彰式	8
エクスカージョン	8
宮崎の木育について	9
広げよう学校での木育	11
木育・森育推進全国マップ2017	13



学校木育の推進と課題

田口 浩継 (熊本大学 教授)

近年、生活の洋式化や代替品の進出といった人々の生活環境の変化に伴い、生活で身近に使われていた木製品や木材の利用が著しく減少している。さらに、趣味の多様化やインターネット・家庭用ゲーム機の普及により、日曜大工や木工芸を行う人も減少したり、高齢化したりしているため、人と木材との関係が疎遠になっている。

このような背景から、2004年度に北海道において「木育」が提案された。その後、2007年には林野庁の「木づくり運動」の中に「木育」が加えられ、現在木育は全国に広がりつつある。さらに、2020年には日本政府公式行事として「木の総合文化(ウッドレガシー)」の開催が決定し、種々のイベントの準備がなされている。

これらの木育の実践・対象については、社会教育と学校教育に大別できる。現在、木育の実践について、社会教育では企業やNPO法人が積極的に活動を展開している。学校教育において、小学校学習指導要領では、児童の自然事象に接する機会の減少が指摘され、自然についての体験的な学習活動や自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実が求められ幾つかの実践も見られる。同様に、中学校においても技術・家庭科での実践が見られる。

しかしながら、社会教育に比べ学校教育での木育の実施は、学習指導要領にも関連した教育内容があるにもかかわらず、充実しているとは言い難い。その理由は授業時数との兼ね合い、教員の理解不足、指導スキルの不足等の課題が山積しているからである。今後、木育の拡大・充実を目指すためには、学校教育での展開が課題となり、現職の教員に対する研修や、教員養成系学部・課程の講義でも積極的に木育の内容を取り入れていくことが望まれる。

実践者の声

長南 あずさ (北本市立南小学校 教諭)

学校での木育。それは特別な活動ではありません。日々の生活や学習の中で、木や森に目を向けさせ、親しみをもたせるきっかけづくりこそが大切なのだと思います。特別な講師や教材を使ったり、イベントとして木や森に集中的に関わらせたりする取り組みだけではありません。校庭の樹木が季節を追って変化していく姿に気づかせたり、図工で使う材料を「木材」ではなく「スギ」「マツ」と樹種名で呼ばせたりなど、教員側の働きかけ、言葉の使い方によって、木や森に対する豊かな感性を育むことができると思います。

学習指導要領を見ると、社会科、理科、生活科、図工、道徳など木育に関連する学習は意外とたくさんあります。そうした既存の学習で、教える側がほんの少し木や森との関係に目を向けさせ、そして言葉を添えることで、木育は十分成立するのではないかと思います。日々多忙といわれる学校ですが、日常的な教育活動の中で、どのような木育が実践可能か、今後も考えていくことが大切です。



第3回木育・森育楽会in宮崎

基本 テーマ

魅力ある木育・森育の実践拡大、
そして質的向上への挑戦
学校教育における木育の普及拡大

日時 2017年12月3日(日)
会場 みやざきアートセンター
共催 宮崎県

問題別討論①

義務教育と木育・森育 ～小中学校編「学校における木育の可能性」

進行:藤元 嘉安(宮崎大学 教授)
コメンテーター:宮崎県教育委員会

- ・小学校 埼玉県の事例 「松の木プロジェクト」の概要
長南 あずさ(北本市立南小学校 教諭)
- ・中学校 東京都の事例 「国産材を利用したものづくり活動」
遠藤 智史(自由学園 講師)
- ・全体討論

問題別討論②

高校生、大学生と木育 ～高校・大学編「木育とデザイン」

進行:石田 達也(宮崎文化本舗 代表理事)
コメンテーター:田口 浩継(熊本大学 教授)、
若杉 浩一(パワープレイス シニアディレクター)

- ・大学 北海道の事例発表 「地域材を活用した笑(え)木(ぎ)(駅)前空間デザインチャレンジ」
堺 千里(公立はこだて未来大学3年)、山本 賢治(北海道芸術デザイン専門学校2年)
- ・高校 宮崎県の事例発表 「高校生木育デザインプロジェクト」
宮崎工業高校、都城西高校の生徒さん
- ・全体討論

木育・森育体験分科会

分科会① 子どもが楽しむ! 施設づくり

「ことごと」ができるまで、できてから

講師:藤井 真由美(日南市子育て支援センター「ことごと」所長)
近藤 亜子(日南市子育て支援センター「ことごと」保育士)
奥 ひろ子(パワープレイス)

分科会② こどもがわかる! 木と森のものづくり

「楽しみながら学ぶものづくり体験(ツリーハウスづくり)」

講師:寺床 勝也(鹿児島大学 教授)

分科会③ こどもが変わる! 地域素材を活用したものづくり

「こどもの学習支援に向けた体験活動(地域素材を使って)」

講師:田口 浩継(熊本大学 教授)

分科会④ こどもがはまる! 教材づくり

「道具の活用・工夫でレベルアップ」

講師:永富 一之(大阪教育大学 教授)

基調講演

「木と森とともに暮らす未来を考える」

西原 智昭(WCSコンゴ共和国・自然環境保全技術顧問、NPO法人アフリカ日本協議会・理事)

全体討論

「木育・森育がつくるヒト、地域、未来」

進行:浅田 茂裕(埼玉大学 教授)
コメンテーター:玉置 賢(林野庁木材利用課 課長)、
山下 晃功(島根大学 名誉教授/木づかい子育てネットワーク 顧問)、
若杉 浩一、藤元 嘉安、田口 浩継

表彰式

勝手に表彰、ヒト・モノ・コト賞

プレゼンター:石田 達也、若杉 浩一、田口 浩継、浅田 茂裕

その他

1F「太陽のひろば」では木の遊具で遊べるコーナーを終日設置

問題別 討論

①

義務教育と木育・森育～小中学校編 「学校における木育の可能性」

学習指導要領や学校の多忙さなどにより、木育・森育の普及が遅々と進まない。しかしそれは言い訳にすぎない。発表者だった埼玉の長南あずさ氏(北本市立南小学校)、東京の遠藤智史氏(学校法人自由学園)も、それぞれ同じような障害や周囲の理解のなさに苦心していたはずだ。彼らはなぜ木育を学校で実現させることができたのか。

それは貫こうとする純粋な思いであり、それが周囲の認識を変えたのではない。もちろん、人との出会いも必要であるし、タイミングも重要である。しかし発表者二人のように、思い切って発言し、行動し、やってみてはどうだろう。いきなり教科化するとか、カリキュラムに位置付けるとかを考えなければ、いろいろな手がありそうだ。

こどもを変えたい、こどもに伝えたい、そして共感できる心を育てたい。教える側の心が教育を変える力ではないか。無理だという前に、批判する前に、始めること、もがくこと。そして楽しむこと。その重要性を教えられた時間だったように思う。

文・浅田 茂裕(埼玉大学 教授)



②

高校生、大学生と木育～高校・大学編 「木育とデザイン」

森育・木育学会に思う

北海道大学生の道南木づかいプロジェクト、宮崎の高校生デザインプロジェクト。どちらも、地域の若い世代が、地域の素材「杉」を使ったデザイン提案の成果発表だった。大人、専門家、行政と学生たちが、それぞれの対象に向かって、全力で挑んでいた。その成果は、プロ顔負けの内容で、発表も素晴らしく参加していた、全ての人たちが感動していた。

そこには、大切な学びがあった。

従来の教育の「生きる術」を学ぶのではなく、誰かのために、考え、苦勞し、動き、繋がり、作り、伝えるという、遅く、力強い、「生きる力」への学びだった。

そして、中心に、「木」とデザインがあった。

デザインという仕事ではなく、「生き方」を学んだのだった。

きっと、この経験は、彼らが、今後、生きていく上で、大切な支えになるに違いない、そう確信した。素晴らしい時間だった。

沢山の「考える大人たち」が創った「考える人たち」の創造だった。

自分で考え、自分で動き、自分で創っていく。

そして「喜び」「感謝」「敬愛」「自分の存在」。

「誰かのために考える」ことは、沢山の人を介して「自分を考える」事につながり、「生きる力」として人を躍動させる。

これからの未来を創る学び、そして真ん中に「木」があった。

本当の木育とは、他者を思い、考える「生きる力」のこともかもしれない。



文・若杉 浩一(パワープレイス シニアディレクター)

基調講演

木と森と暮らす未来を考える

基調講演を行っていただいた西原氏が活動を続けるコンゴでは、熱帯材の需要の高まりから、原生林にトラックの通れる道を作りながら伐採を行う事業者が急増しています。道ができて便利になったのと同時に、象牙を狙ったマルミゾウの密猟の規模も大きくなっています。森林に住むゾウは大量の果実を食べ、種子入りの糞を広範囲に落とします。それは様々な種子を蒔くこととなり、森林の生物多様性を守る役割を担っているのです。

日本は熱帯材そして象牙の大消費国であり、遠い国と感じるこのアフリカ、コンゴの環境問題に、実は深くかかわっています。マルミゾウを絶滅から救うためには、使い手の意識を変えていく必要があります。それは使うか使わないか、の白黒二者択一ではなく真ん中の「グレーの道」を模索することが必要だと、この講演でも強く語ってくださいました。西原氏に、その内容にもとづいてご寄稿いただきました。



アフリカ熱帯林における森林伐採



アフリカ熱帯林の中での著者

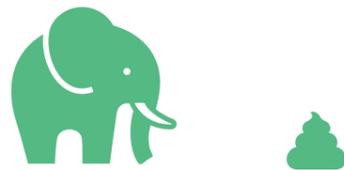


マルミゾウの糞の中からの芽生え



西原 智昭

自然環境保全マネージメント技術顧問
国際野生生物保全協会(WCS: Wildlife Conservation Society)
コンゴ共和国支部
コンゴ共和国やガボン共和国などアフリカ中央部熱帯林地域にて、20年以上、野生生物の研究調査、国立公園管理、生物多様性保全等に従事。神奈川県出身。京都大学理学博士。近著に「コンゴ共和国 マルミゾウとホテルの行き交う森から」(現代書館)。



寄稿



環境から選ぶべき書籍は紙か、電子か

西原 智昭

書籍について考えてみましょう。紙の利用は森林破壊を加速化し、それは地球温暖化など気象変動をさらに招きかねないと言われています。ならば、紙を一切使わない「電子書籍」をこれから普及させていかなければならないのでしょうか。

電子書籍であれば、小さな機器の中に何冊分もの書籍を盛り込むことができ、旅行などの携帯には便利である上に、紙を使用しないため地球環境保全に役立っていると思われる。一方で、紙で作られた書籍は、自分の必要に応じてページを自由に前後させることや、気になるページに折り目をつけたり、気になる一説に線を引くことなどが容易です。

ここで電子書籍が作られている原材料に目を向ける必要があります。電子書籍は携帯電話やパソコンと同様、レアメタルなどの金属が使われています。そして、そうした鉱物資源の大多数は、アジアやアフリカなどの途上国にて森を破壊して採掘されているという事実も考慮しなくてはなりません。電子書籍は一見森林保全に役立っているかのように見えて、実はその反対の森林破壊に大きく貢献していることとなります。

ただ、単純に紙の書籍がいいというわけにはなりません。紙を生産するのに森林を極めて厳格に管理し、森林が永続的に存在して行くようなあり方が必要となってきます。その最善の方策がFSC(Forest Stewardship Council)認証制度に基づいた森林管理です。日本のように植林が可能な地域ではこの認証制度に基づいた管理が、そして熱帯地域のごく少数の樹種だけの植林が可能である地域では、生態系サービスに基づいた自然界による森林の自然再生を可能にさせる管理が必要となります。

FSC認証制度による管理条件は、(1)森林伐採事業による経済的貢献、(2)森林業による地域社会や先住民族への社会的配慮、そして(3)森林生態系の管理です。特に(3)に関しては、植林の場合は生産性と再生効率が高いことが望まれます。熱帯林地域では野生動物への違法行為を阻止すること、特に種子を散布する野生動物の保全を強化することで、自然の森林再生が大きく期待できます。

人類は生きていく以上、自然界の資源を使わなければなりません。その中で森林資源の利用は、一度採掘すれば再生不能な鉱物資源などよりも地球環境保全に有用と言えるかもしれません。ただ現時点では、FSC認証制度に基づいて森林伐採の管理を実施している林業はまだ数少ないです。1つのあり方は、極端な考えを避け、用途に応じて電子書籍を使う一方、FSC認証制度に基づいた森林管理を迅速に振興させながら、紙による書籍を作る企業がそうした認証紙を使用していく努力をする必要があることでしょう。



① 子どもが楽しむ! 施設づくり

「ことごと」ができるまで、できてから

施設の構想段階において、ニーズを引き出すワークショップ、餌肥杉の森林見学ツアー、伐採されたスギを使ってココロカー作りのイベント開催などを行いました。また、中間報告会、木のおもちゃを知るワークショップ・アンケートを実施、子育て応援フェスなど様々な企画を開催。拠点整備と運営側が分断された状態でオープンを迎えるのではなく、設計・デザイン・ニーズを様々な人たちと共有・ディスカッションしながら進めてきたことが、この施設の魅力を高めるキッカケになったと感じます。8ヵ月で20,000人を超える利用者があることがその価値を語っているといえます。



② こどもがわかる! 木と森のものづくり

楽しみながら学ぶものづくり体験 (ツリーハウスづくり)

自然の枝を「樹木」にみ立てて、ミニチュアサイズのツリーハウスをつくりました。「樹木」にプラットフォームを組み立てて、夢のオリジナルツリーハウスです。様々な長さ、形、厚みの素材が用意され、参加者は念入りに選び込みながら手作業を楽しんでいました。それぞれのカラーがよく出るこのワークショップは、子供から大人まで幅広い年齢層に評判が良い内容です。ワークショップでは、実際のツリーハウスの建設写真やツリーハウスの聖地★米国オレゴン州の事例も紹介しました。



分科会

③ こどもが変わる! 地域素材を活用したものづくり

こどもの学習支援に向けた体験活動(地域素材を使って)

木造の家を建てる人は子供のころに自然体験活動や自然素材でのモノづくりをしたことがある、という傾向がアンケートで分かりました。モノづくりをすると前頭前野が発達するとも言われています。ポイントは、指先を使う、ワクワクしながらやる、程よい難易度がある、です。熊本県では、平成17年度より子どもや保護者を対象とした「くまもものづくりフェア」を開催し、県産の杉や桧、竹、い草などを素材にしたものづくりを提供しています。事前に木材・樹木について学習した上で行うことが効果を高めるポイントです。本分科会では、こどもの学習支援に向けた活動を、参加者の方に体験していただきました。



④ こどもがはまる! 教材づくり

道具の活用・工夫でレベルアップ

絵本「どうぞのいす」のミニチュア版を製作しながら、「きる」「けずる」「つける」道具の活用例を体験する講座を開催しました。特に、「きる」道具として、小型バンドソーを取り上げ、その調整方法や使い方も併せて解説。本分科会講師が開発した初心者でも簡単に使える改良かんをを用いた削り体験も行いました。

小型木工機械や電動工具をもっと活用することで、初心者でも加工精度の高いモノづくりが容易にできることを実感していただきました。



全体 討論

木育・森育がつくる ヒト、地域、未来

北海道から始まった木育は、幼少期から高齢期に至る広い対象に向けて展開され、人と木、森との関わりを考えさせる契機を与える重要な責任を果たそうとしてきた。学校教育における木育もまた、10年以上にわたって様々な挑戦が続けられてきた。この木育をさらに推進し、広く水平展開させていくためには、効果的な教材やプログラムの開発、実施、指導者養成等が引き続き重要である一方で、地域における木育推進の芽に気づき、それを支援することの必要性がある。熊本ものづくり塾を中心に地域に根差した取り組みを進める田口浩継氏(熊本大学)、企業として、デザイナーとして地域の木育推進を支える若杉浩一氏(パワープレイス)の取り組みは、これからの木育・森育の実践者にとって大きな指針となるものである。

フロアの高校生、大学生をはじめ多くの参加者との意見交換ののち、全体討論まとめとして、玉置賢氏(林野庁)から、これからの学校教育における木育への期待、地域活動の重要性が、山下晃功氏(島根大学)からは学校教育における木育の在り方についての提言が述べられ、この討論を締めくくった。



表彰式

勝手に表彰、 ヒト・モノ・コト賞

木育・森育、木を通しての教育活動に多大な貢献をしてくださった方々を、プレゼンターが勝手に表彰する企画。宮崎の「高校生木育デザインプロジェクト」の発端のお二人、熊本で木育活動を続ける方、北海道函館の「みんなですすめる木づくりプロジェクト」の推進役、といった面々が表彰され、会場に居合わせた受章者はドッキリ状態でした。最後はプレゼンター役の3人の教え子が恩師、鹿児島大学の松田健一名誉教授を勝手に表彰。「今活躍している人が、学生の時に必ずしも出来が良かったわけではない」というお言葉をいただき、会場が湧きました。



エクスカーショ

宮崎県の主催で木育・森育楽会の前日12月2日に行われたエクスカーションでは県内外から45名の参加者を迎え、2台のバスにて日南市の木育関連施設を訪れました。

学校法人吾田学園「あがた幼稚園」、油津商店街の「油津オアシスこども園」、日南市子育て支援センター「ことごと」の3か所を訪問。それぞれ宮崎の木をふんだんに使った特徴ある内部構造や木育の楽しい仕掛け、子供たちの様子などをご説明いただきました。



宮崎の 木育について



製材工場や森林組合など林業関係者による木工教室や木づかい啓発イベントから始まった宮崎の木育は、平成25年の「みやぎ木づかい県民会議」、平成28年の木育ネットワーク部会の立ち上げにより大きく広がりつつあります。林業や木材の関係者だけでなく幼児教育や学校の教員、デザインを学ぶ学生など幅広い関係者が参加し、様々なことにトライしています。高校生木育デザインプロジェクトもその一つで、工業デザインを手掛けるプロのデザイナーや環境学習に取り組む講師、専門家の支援を受けながら、『地元の木によるおもちゃづくり』を進め、循環資源である木材、デザイン、木製品が生まれる背景について理解をする活動を進めています。試作品は12月に宮崎で開催された木育・森育楽会で、そのコンセプトとともに発表されました。

宮崎県環境森林部山村・木材振興課
みやぎスギ活用推進室 副主幹 外山 賢

高校生デザインプロジェクトに思う

宮崎工業高等学校 教諭 屋良晴美



【ふつつつとした思い、そして出会い】

現在、私が勤務している宮崎工業高等学校インテリア科は、「木材加工」を中心に「デザイン」「工芸」も学べる学校です。しかし、学んだことを生かし、「地元に残る」という生徒の宮崎愛を貫くにはとても厳しい現実が待っておりました。3年生を担任する事が多かった私は、この現実を伝えるのは心苦しく「何とかしなければ…」という焦りが募るばかりでした。その思いと同時に、「学校」という枠の中だけに生徒達を縛って良いのだろうか。「世の中」という大きな世界をこの若くて感性の鋭い時期に味わった方が良いのではないか、という沸々とした思いが常にありました。

そんな中、3年前の夏、東京在住の高校時代の友人から「私が尊敬する人の講演会が宮崎であるから、是非参加して!!」というメールが届いたのです。「どうせ暇だし…」という軽い気持ちで参加した私でしたが、この講演会でずっしりとした熱くて真っ直ぐな魂・若杉浩一(パワープレイス)さんに出会い、今にも消えそうな思いが再び沸々と湧きあがり、一筋の光を見出したような、清々しい思いがしました。

若杉さんと出会い、スギドラケ倶楽部の皆様との出会い、そして同じく生徒達の活躍の場を求めている都城西高校

美術教員・串間弥生先生、県内外で活躍されているみやぎアートセンター、宮崎県庁、県森林林業協会、日南市役所、内田洋行、良品計画の皆様、まだまだ書ききれないメンバーが集合することになりました。この出会いこそが「木育」との出会いでした。それからは、ジェットコースターのように勢いよく進めていただき、1年経たないうちに「第1回高校生木育デザインプロジェクト」が開催されることになりました。



若杉さんと生徒のツーショット

【高校生木育デザインプロジェクト】

現在3回目を迎えたこのプロジェクトでは、毎回、様々なドラマが生まれます。そのドラマの結末は、生徒の成長につながり次は生徒達の中で各々のドラマが始まっているように思えます。

第1回目のプロジェクトは初めてということもあり、生徒



第1回目の高校生木育デザインプロジェクトの様子

よりも私自身が意気込んでいたような気がします。夜も遅くまで生徒と取り組み、何度もやり直しをさせ、生徒の中にはもう参加したくないという生徒もいました。しかし、プロのデザイナーに直接アドバイスをもらうことで希望をもった生徒がいたのも事実です。実際、参加した生徒の中には、木製家具をデザインしたいと進学した生徒や、この木育の面白さを伝えたいと教員を目指す生徒が生まれ、今も頑張っている姿をみると頼もしく思えます。

みんな懲りてしまって参加者はいないだろうと思いがら始めた第2回。参加者を募ったところ、「次こそはリベンジしたい!!」と勢いよく手をあげてくれた生徒がいました。大変、嬉しく思いました。生徒達の自主性に任せて進めていくうち、グループ内で衝突が起こりはじめました。何が何でもリベンジ!!という気持ちが強すぎたのでしょうか。「先輩が私達の意見を無視します」「先輩が勝手に休みました」「先輩が…」と後輩達はたった4人の小さな世界で不条理を学んでいきました。本番当日、「人間関係の難しさを知りました」と周囲の大人達に不満を爆発させていました。私は、これこそが本当の学びなのではと感じました。この周囲の大人達に自分たちの本心を語る姿は、どんな事があっても受け止めてくれる信頼できる、安心できるつながりを築けたからこそだと思います。そして木育だったからこそ、この本当の学びができたのではないのでしょうか。



第2回高校生木育デザインプロジェクト

【プロジェクトのひろがり】

今年度、3回目のプロジェクトが行われました。夏には「もくもくパーク」というボランティアのお世話をいただき、ここで生徒は師匠達(木育サポーターの大ベテランの方々)と出会い、ものづくりを通して木工技術について教わり、「師匠」と生徒達の家族でもない、友達でもない、しかしネットや教科書では教えてくれないとても大事なつながりを学んでいきました。



夏に行われる「もくもくパーク」での師匠と生徒達

授業の中では、県内の林業、製材業などの企業を見学する木育ツアーを組んで頂き、本年度は保護者向けツアーを組み保護者の理解を得ることができました。修学旅行では「MUJI」「内田洋行」の見学をさせて頂くという、独自の木育に取り組むことが出来ました。こうした取り組みの結果、県外に就職したいという生徒が減り県内就職希望者が増え、しかも木材関係に勤めたいという生徒も現れはじめました。日南市「ことこと」を見学



【木育ということ】

「木育とは…」と問われ、まだまだ勉強不足の私には答えられる自信がありません。しかし、毎日の日々の中で生徒達が木育と関わることによって大きく成長していることを実感しております。それは、未来を夢見てデザインやものづくりを志すもの、自らの力で学校以外の大人とコミュニケーションを図りつながりを持つこと…。

なぜ生徒達が親しみを込めて「師匠」と呼ぶのか? なぜ、生徒達が信頼して師匠達の話聞くのか? 年輪のようにこつこつと成長させてくれる木育を通して、これからも生徒と共に学んで行きたいと思っております。

謝辞

このプロジェクト実施にあたり、宮崎県庁の外山さん、県森林林業協会の八木さんには日ごろから熱心に私たちの木育を支えて頂いております。特に記して感謝の意を表します。

広げよう 学校での木育

木や森について学ぶ場として、学校はとても重要です。社会科、図画工作科、技術・家庭科、総合学習などの学習活動として木育・森育の優れた実践が各地で進められています。



松の木プロジェクト 埼玉県北本市立南小学校

松枯れの被害にあい、やむなく伐倒されることになった北本市立南小学校のシンボル、樹齢100年の赤松。校歌にも歌われるこの松を後世に伝えようと、「松の木プロジェクト」が始まりました。保護者、地域の企業などの協力を得て、松の木はモニュメントやベンチ、マグネットに変身。子どもたちは松の木と北本市の歴史、暮らしを学び、松への思いをこめて「松の木物語」を執筆するなど、道徳教育の一環として木育の学習を行いました。



みんなですすめる 木づくりプロジェクト 北海道渡島総合振興局



「地域材を活用した笑(え)木(き) (駅)前空間デザインチャレンジ」地域の木材を使って、函館の駅前に置くストリートファニチャーを専門学生、大学生・大学院生から募集して実際に作るプロジェクト。参加者は2泊3日の合宿に参加し、森林・木材加工体験を通して基礎知識を学び、デザインについて研修を受けた。コンパクトに収納できること、地域性を取り入れること、それ自体がイベント性を持っていることという条件のもと、応募されたデザイン画を実際に作り上げるところまでやり遂げた。オープンスクール形式で、学校で学びきれないことを学ぶ場となっており、今年度は「空き家から賑わい道南スギ空間を創出するデザインコンペ」が開催された。



木育・森育近畿フォーラム 実行委員会

「木育・森育近畿フォーラム2017」の開催に先立ち、「第2回木育・森育集会」が2016年に大阪で開催され、引き続き、近畿の木育・森育に関わる活動団体のつながりを保ち広げることを目的として、本フォーラムを開催した。近畿およびその近隣県から約40名の活動者が集まり、奈良県吉野町の木育への取り組みをはじめ、近畿各府県の活動紹介などを行った。近畿は、木造建築や林業において長い歴史と誇れる文化を持ち、木育・森育の進展に寄与する潜在力があることから、今後も本フォーラムを継続し、近畿ならではの、特徴ある活動を充実させていきたい。



木の学び 机と椅子の更新プロジェクト 学校法人 自由学園

自由学園女子部中等科・高等科では2011年から、木造校舎の教室に合った木製の机と椅子の更新を、生徒自らの手で企画して進める取り組みを進めている。生徒たちは家具のデザインを木工メーカーから指導していただいたり、材料の出处を知るため、広葉樹の人工林に足を踏み入れて、森林の循環についても学んでいる。このプロジェクトによって、森林環境に与えるインパクトを感じたり、物の生産から廃棄までを知ったことで、系の生徒だけでなく学校全体として、木に対する価値観が変わってきている。

くまもと木育のつどい 熊本県

平成27年度に木育・森育学会の地方大会として「第1回 木育・森育学会九州大会」を、熊本県長洲町ながす未来館で開催した。9件の発表と木育体験(ミニものづくりフェア)を実施した。平成28年度及び29年度は、熊本県の主催、熊本大学、熊本ものづくり塾の共催により、「もっと木育! くまもと木育のつどい」という名称で、木育・森育学会の熊本大会を継承している。本年度は、4件の発表とパネルディスカッション、グループワークが行われ教育関係者、行政、民間企業、NPO、学生など約70名の参加があった。



木育・森育推進 全国マップ 2017

全国の地域・学校等で活動する皆さんの拠点を
マップにまとめました。

この他にもたくさんの方が活動をされています。
今後もこの木育・森育楽会のネットワークで
つながっていききたいと思います。



2 子育て支援センター「ことこと」

1 宮崎県宮崎市
みやざきアートセンター
第3回「木育・森育楽会」開催

2 宮崎県日南市
子育て支援センター
「ことこと」

3 宮崎県宮崎市
高校生
木育デザインプロジェクト

4 熊本県熊本市
くまもと木育のつどい

5 熊本県小国町
学校木育推進宣言

6 島根県松江市
島根大学附属幼稚園

7 大阪府大阪市
木育・森育近畿フォーラム

8 長野県塩尻市
木育全国生産者協議会

9 東京都東久留米市
自由学園
木の学び
机と椅子の更新プロジェクト

10 東京都港区
学校木育の推進
「みなと木育プロジェクト」

11 東京新宿区
東京おもちゃ美術館
木育キャラバン、ウッドスタート事業

12 埼玉県北本市
北本南小学校
「松の木プロジェクト」

13 埼玉県川島町
小学校木育推進宣言

14 北海道函館市
みんなですすめる
木づかいプロジェクト

15 北海道茅渚郡森町
木育マスター道南支部



3 高校生木育デザインプロジェクト



4 くまもと木育のつどい



9 自由学園



14 みんなですすめる木づかいプロジェクト



15 木育マスター道南支部

学校木育推進のための拠点校(大学・研究室)

16 熊本大学
田口 浩継

20 山口大学
岡村 吉永

24 東京学芸大学
大谷 忠

17 鹿児島大学
寺床 勝也

21 広島大学
木村 彰孝

25 埼玉大学
浅田 茂裕

18 宮崎大学
藤元 嘉安

22 大阪教育大学
永富 一之

19 福岡教育大学
大内 毅

23 愛知教育大学
磯部 征尊

26 島根大学
山下 晃功

29 琉球大学
福田 英昭

32 岐阜大学
小原 光博

27 鳴門教育大学
尾崎 士郎

30 大分大学
市原 靖士

33 イスペット
株式会社
藤田 真一

28 九州産業大学
諫見 泰彦

31 熊本大学
楊 萍